

Title	<紹介>中本大編『名庸集－影印と解題－』
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	語文. 2014, 102, p. 37-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70934
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中本大編『名庸集—影印と解題—』

合 山 林 太 郎

本書は、近世初期にその来歴が確認される人名集成『名庸集』、(信多純一氏旧蔵、現在は神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵)及び『名庸集』ともと一体であったと思われる仏家の伝記集成『燈分録』(国立国会図書館所蔵)の影印である。第一・二巻に『名庸集』が、第三巻に『燈分録』が収録される。

また、本書には、中本氏による解題が付される。解題は、「I 菊隠慧叢について—『名庸集』研究序説—」「II 『名庸集』の書誌—III 『燈分録』について—IV 『名庸集』の編者—V 『名庸集』の別本—VI 後水尾院と寛文年間の五山禅林文壇」の六章から成る。以下、その内容を要約し、本書の紹介に代えたい。

I は、『名庸集』の成立と関わりが深いと考えられる菊隠慧叢についての分析である。中本氏は、近世初期の五山文壇の領袖鳳林承章の日記『隔窠記』寛文四年四月五日の記事から、この『名庸集』が菊隠慧叢から鳳林を介して後水尾院に献上されたものであると論じ、菊隠の事跡及び僧侶としての性格を明らかにしている。具体的には、菊隠が、正保三年一月四日、相国寺慈照院派塔頭の梅熟軒において得度していること、古市(清原)胤子が菊隠及び長得院との関係から、菊隠が貴顕との関係を持つ人物であったと考えられることなどを述べる。

以上の考察を踏まえつつ、中本氏は、菊隠を、「実務家の僧侶」(第三巻、二九三頁)であり、文事に明るい人物であったとは考えにくいと論じている。また、『隔窠記』中に記される『名庸集』献上の経緯について、なお不明な点が多いとしている。

II では、『名庸集』の書誌事項、及びそれが成立するに至った文化的背景が論じられている。中本氏は、『名庸集』に、桃源瑞仙による『三体詩』注釈書の文章が引用され、また、抄物の文体が取り入れられていることを指摘し、この資料が五山の伝統を濃厚受け継いでいると述べている。すなわち、『名庸集』が第一義的には五山僧の漢文制作のために作られたと推定している。

その一方で、『名庸集』に引用される『古今源流至論』に注目し、それが、中世五山の伝統においては参照されず、文禄・慶長の役以降、流布した書であることなどを述べ、『名庸集』が、一七世紀の学問における新潮流、すなわち、「新興儒者や上層町衆・医師らの集書が活況を呈するなか、五山学僧が受容に関わらない漢籍が文壇に紹介される事例が増えていった近世初期」(同、三〇七頁)の思潮の影響を受けていたとも論じているのである。

III では、『燈分録』の成立や由来、性格などが分析されている。具体的には、この『燈分録』が国語学者岡田希雄に所蔵されていた可能性があること、本書影印所収の『名庸集』とツレの関係であることが指摘されている。このほか、『名庸集』の目次と、実際の『燈分録』における記載との比較によって、中本氏は、『燈分録』が「項目や記載を補いつつ変化する可能性を秘めた、未完

の一書であった」(同、三一三頁)と推定する。また、『燈分録』に、林羅山による『徒然草』の注釈書『野槌』が引用されていることから、その編纂の背後に、林家などの一七世紀の新しい学問の潮流との関わりが想定できると論じている。

IVは、『名庸集』『燈分録』の編者についての考察である。『燈分録』冒頭に記される「雲興」という語から、中本氏は、編者の候補として後水尾院の信頼の厚かった雲興軒四世雪岑梵釜の名を挙げるものの、この雪岑を著者と考えることは消極的である。雪岑が編者であれば、『隔莫記』に必ず雪岑についての記載があつてよいから、というのが、その理由である。

Vでは、中本氏が所持する別本『名庸集』との比較によって、影印された『名庸集』の乱丁について指摘がなされるとともに、近世期における『名庸集』受容の一端について考察がなされる。

VIにおいては、鳳林が没する寛文八年までの後水尾院と五山との文事が概観され、その性格が検討される。すなわち、『隔莫記』の記述を追いつながら、寛文三年の「西湖図」詩制作、同四年の「詩仙絵」制作、同六年の後水尾院の弟宮にあたる良純法親王と鳳林との交流、同七年の「湖山十詠」の色紙制作について、その具体的な様相が明らかにされている。

後水尾院の文事からは、先行する時代の文芸への思慕の念を読み取ることができる。とくに和漢の文藻を総合的に把握し、五山僧と多く詩文を依頼したという点で、後水尾院の姿は、義政と五山僧との関係を彷彿とさせると述べている。

ただ同時に、中本氏は、寛文期における新興の儒学者や詩人たちの活発な動きについて論じ、それが後水尾院の視野に入っていた可能性をも指摘している。すなわち、「西湖図」については、那波本『白氏文集』からの関連する知識の流入や野間三竹による『四時幽賞』の刊行との関係性などが、「詩仙絵」に関しては、石川丈山と「三十六詩仙」や林羅山・鶯峰・読耕斎らによる「詩仙」色紙の制作との相同性が挙げられている。

とくに「詩仙図」制作に際しては、鳳林が武田寿詮を介して丈山に連絡していたことが、『隔莫記』中の記述を根拠として示され、後水尾院と新興勢力とのつながりが明らかにされている。

中本氏は、後水尾院と五山僧という伝統的な結びつきを、徳川幕府と林家という新たに台頭してきた勢力と対置的に捉えている。そして、その上で、室町時代という過去への回帰のみを企図せず、同時代の新興の学問の動きにも鋭敏に反応する後水尾院という人物の特異性を析出している。

様々な潮流が交錯する近世初期漢詩文世界の様相を、中本氏は解題において明瞭に提示している。この認識は、中世・近世の研究に携わる者全てに大きな示唆を与えるものである。

(思文閣出版、二〇一三年十月、全三巻、四八二・四二八・三五二頁、三八、〇〇〇円)

(ごうやま・りんたろう 本学大学院講師)